慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森嶋通夫著 思想としての近代経済学
Sub Title	
Author	坂本, 達哉
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1995
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.88, No.1 (1995. 4) ,p.140- 142
JaLC DOI	10.14991/001.19950401-0140
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19950401-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」88巻1号（1995年4月）

書評

森嶋通夫 著

『思想としての近代経済学』

岩波新書，1994年2月

日本には，近代経済学とは無思想の経済学だという「迷信」がある。マルクス経済学は唯物史観や社会主義思想と一体の思想的経済学であるのに対し，近代経済学はそうした歴史観やイデオロギーを切り離し，洗い流した純粋理論であるという強固な固定観念がそれである。こうした「迷信」が生まれてきた背景のひとつに，特殊日本的な「近経対マル経」という不幸な対立の歴史があることはいうまでもない。

しかし，こうした「迷信」の由来はそれほど古いものではない。福沢諭吉，田口卯吉といった明治期の経済学導入前史を別とすれば，1920—30年代に活動を開始した福田徳三，高田保馬，小泉信三，中山伊知郎などは，いずれも当時のヨーロッパの最先端の経済学および経済学史をそれぞれの形で幅広く吸収し，これを研究，教育の現場に定着させようとした。福田が『資本論』の最初の紹介者であるとともに，経済史，経済政策，そして近代経済学の諸理論の導入者でもあった事実はその意味で象徴的なことであった（この点については，池尾愛子『20世紀の経済学者ネットワーク——日本からみた経済学の展開』有斐閣，1994年，を参照されたい）。

ところが，この時代の日本は日本資本主義論争を中心とするマルクス主義および社会主義運動一般の隆盛期でもあったから，主として政治的理由によって近代経済学の没思想性，体制順応性という現実の傾向が生まれ，それが学問の世界をも支配した戦後の冷戦構造のなかで固定化されたのである。森嶋通夫氏の新著は，こうして生まれた日本的「迷信」に対する強力な解毒剤である。ワルラスが土地国有化論を主張したれっきとした社会主義者であり，スーパー・コンピューターを利用した社会主義的計画経済の可能性を近代経済学の最新の理論が証明しているなど，近代経済学を資本主義体制の弁護論とみる俗見の一面性を著者は十二分に証明してくれる。

しかし本書は，このような日本的「迷信」の批判だけを意図しているわけではない。むしろ著者は，現代の経済学の世界で確固たる地位を占めている一般均衡理論の問題点（セイ法則の承認と「耐久財のディレンマ」問題の無視ないし軽視）に鋭い批判のメスを入れ，こうした理論上の問題点がたんなる分析上の欠陥であるにとどまらず，現在の近代経済学全体が陥っている没思想的，没歴史的傾向に深く根ざすものであることを解明していく。著者によれば，近代経済学の本質についての日本の「迷信」は経済学の現状にかんする限りでは一定の根拠をもち，その意味で，世界の「迷信」でもあり得るが，それは決して近代経済学の本質ないし伝統に由来するものではないのである。

著者は，ワルラスの一般均衡理論を基礎とするいわゆる近代経済学が，その限界分析においてリカードの差額地代理論にルーツを持つこと，自由競争にもとづく資本と労働との市場均衡の認識はマルクスのそれと同一のものであることを指摘し，マルクス，ワルラス，リカードの三者を「近代経済学の第一世代」（4頁）として一括する。これに似た経済学史へのアプローチは，すでに杉本栄一『近代経済学の解明』（1950年）にも見られるが，本書の新鮮さは，一般均衡理論を頂点とするこの理論的伝統と，古典的資本主義から大きく変質した20世紀の資本主義の諸矛盾に対する批判的な社会認識とが合流する地点に，「思想としての近代経済学」の豊かな世界を描き出そうとするところにある。従来も，マーシャルの「冷徹な頭脳と暖かい心」という言葉を引くまでもなく，近代

経済学の偉人たちが，理論家としてはともかく，人間としては深く広い社会的・歴史的関心の持ち主たちであったことはいわば常識であった。しかし著者は，こうした常識的理論から一歩も二歩も踏み込んで，近代経済学者においても人間と学問とが切り離し得ないこと，彼らの経済学とりわけその諸理論それじたいが，壮大な社会科学体系の一環として意図されていたことを具体的に明らかにしている。

著者によれば，従来，近代経済学と総称されてきたものは，３つの異なる研究領域の複合体である。その第１は，ワルラスの一般均衡理論に代表される，市場における人々の合理的経済行為を演繹的，数学的に説明する「経済理論」であり，第２は，シュンペーターの企業者革新の理論を典型とする，非合理的で感情的な経済行為を帰納法的，経験主義的に考察する「経済学」であり，そして第３は，マルクスの唯物史観やウエーバーの宗教社会学に代表される，直接には経済的とはいえない政治的，宗教的，社会的諸行為を取り入れる「総合経済学」である（166-169頁）。最後の「総合経済学」の最良の成果として，高田保馬の「勢力」理論，ウエーバーの私企業官僚制分析，パレート，シュンペーターの「エリート」理論などが高く評価され，それらにおいて，経済学と社会学との有機的な総合が達成されつつあったことが指摘される。

本書の特徴は，これら三種の経済学を区別しつつも，相互に関係させるという議論の組み立て方にある。著書は，「理想型概念の意識的使用と，価値判断と科学的推論の分離は社会科学の基本である」（36頁）として，ワルラスによってウエーバーより30年も早く確立された「価値自由」論が近代経済学の共通の前提となったことを確認しながらも，そのことが近代経済学一般とりわけ「経済理論」の没思想的性格を印象づけてきた事実をつよく意識している。そこで著者は，三種の経済学の相互関係を，対象とする社会的行為の種類（市場的か非市場的か，合理的か非合理的か）と用いられる分析方法の種類（帰納的経験的か演繹的理論的か）によって区別すると同時に，人間の経済活動が，現実には複雑な社会的，歴史的諸行為として発現することを重視し，それら相互の緊密な関連を強調するという重層的な考察を展開する。

著者の分析は鮮やかであり，ユーモアにあふれたその語り口は魅力的であるが，他方では，こうした角度から近代経済学の思想性ないし社会科学としての総合性を論証しようとする著者の議論には精粗の差もみられる。ワルラス，ウエーバー，シュンペーター，パレートなどの充実した考察に比して，フォン・ミーゼス，ケインズの分析は簡略化されており，専門家には不満が残るであろう。本書の主題設定からすれば当然に論じられてよいヴェブレン，マーシャル，ハイエクなどが漏れていることも残念である。しかし，著者は取り上げたどの人物にも一定の距離を保ち（恩師高田保馬への愛情あふれる記述は別としても），それぞれの長所と短所とを冷静に選り分けながら，その長所を総合したところに，あるべき社会科学の理想像を追求するという姿勢を貫いている。そして，著者ならではの力強い筆致にも助けられて，その試みは説得力に富む成果をあげている。

それと同時に，複数の思想家＝経済学者の長所をいわば折衷的に「総合」しようとする著者の試みには疑問がないわけではない。「史観の問題はどの史観が正しいかの問題ではない」と言う立場から，資本主義の成立過程に対してはマルクスの唯物史観が，ソヴィエト・ロシア社会主義の成立にはパレート流のエリート理論がそれぞれ有効だとして，「…歴史の説明も，ある場合は唯物史観で，他の場合は他の史観によると考えるのが史観に対する賢明な態度である」（81頁）と断言し，社会科学の「マルクス的総合」と「パレート的総合」の相対的優劣を，「パレートが正しい場合には…マルクス経済学者は，誤っている」（183頁）という形で便宜的に判定する著者の論法には，マルクス主義者ならずとも戸惑う人は多いだろう。

「マルクスと高田の史観が前進を説明し，シュンペーターとパレートの理論がサイクルを生成し，ウエーバーの流動的な適合関係が，進化要因となるであろう」(184頁) というのも，真の意味での方法的総合といえるのか疑問が残るところである。

三種の経済学の対象と方法との有機的関連は，個々の思想家によって大きく異なり，そこに思想家独自の個性が生まれることを著者はよく認識している。そこに各経済学固有の家族的，人種的，階級的などの背景の影響が正当にも重視されるのだが，それら伝記的諸要素と各経済思想の形成史とのつなげ方は，思想史研究としてみた場合，いかにも機械的であり実用主義的である。「理科的学問の落ちこぼれが，素朴であるとはいえ社会改革の情熱に燃えて経済学を始めたために――そして自分の理論だけでも理解してもらいたいと，自分の価値観を理論から分離，追放したために」(36頁) ワルラスの価値自由論が生まれたとか，ウエーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が「実業家の血を引いた父と，宗教的な純粋な母の適合性を確認しよう」(120頁) とする試みであったとする点も，読み物としては面白いが，思想史的評価としてはより詳細な論証が必要であろう。

とはいえ，本書が近来まれにみる内容の充実した経済学の啓蒙書であり，社会科学への入門書となりえていることに疑問の余地はない。マルクス，ケインズ，シュンペーター，ハイエクなどの例をあげるまでもなく，かつての経済学の巨匠たちはその多くが傑出した思想家であり経済学史家であった。読者は，本書をつうじて，現代を代表する理論経済学者の一人である著者自身が，同時に一個の強烈な個性を持った思想家，歴史家でもあることを知らされるにちがいない。

坂　本　達　哉
(経済学部助教授)